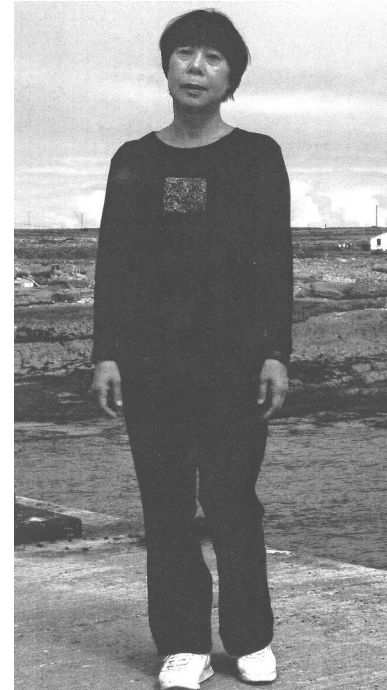


川田 絢音

詩集『ピサ通り』から



川田絢音氏（1940 年～）

目次

街	2
彼女	2
映画	3
桜	4
じゃあ また	5
ピサ通り	6
村	7
グエル公園	7
ホテル	8
ひばり	9
付記	10
著者略歴	10

街

どうしたらいいのか

じぶんのことを考えるかわりに

広場で

犬のまねをしている女の子を見る

自動販売機のセールスでこの街に来て

と やせた男に話しかけられる

痰のはりついた敷石

野菜市場は まぶしい

腕をやたらに動かしている人

手あかで光っている戸口

小鳥屋

曇った海がひろがって

夫だった人がうつむいているようなところが見える

その顔がちぢんで 消える

露地で

おばあさんが 抱きかかえた人形にキスをしている

街の 隙間を

おばあさんは人形を抱いて散歩する

突きささって 動けなくなってしまう

ということがない

彼女

電灯を消して

また 広場の隅を見ている

車が近づいてくる

女がいきおいよくとびだして 大きく両手を打ち鳴らす

車は行ってしまい

女はベンチにもどって肩をいからせている

舌うちしてぶつぶつ言っているのが聞こえるような気がする

並木通りの女たちのようにブラウスの胸をひらかない

空は晴れて

なまあたたかく

菩提樹が浮かびそうになっている

女が

車に立ちはだかって

ばしつと両手を打ち鳴らす

目を覚まそうとも 突きとばすとも見える

からっぽの拍手を聞いてみる

さつきから

窓辺で

夕暮れに見た彼女の暗い眼をまねできない

映画

スクリーンの馬鹿騒ぎに

なさけなくなってしまうながら

立ちあがらない

ピーナッツを食べている男の肩とふれあって

ときどき

男は身体をゆすつて笑う

バスでとなりあわせたように

ただ

人がそばにいるのにほっとしている

映画が終りそうになると

誰かがスクリーンにむかって

おやすみ

と言った

わたしたちはピーナッツの殻を踏みつけて

出口の方へ寄せていく

桜

ポーリ夫人は鶏をうでている

流しのそばの鏡の中に

耕やされた土がひろがっている

そこからは何も聞こえない

停車した駅の陽射しをあびているように

わたしはサラダ菜をちぎっている

ポーリ夫人の息子が腕にさわった

食後

わたしたちは

川のほとりで抱きあうだろう

窓からあいさつする隣の女に　わたしも

さくらんぼうがよくみのっているのをほめる

わたしの桜

彼女はおそろしくはつきり発音して行ってしまう

台所に家族があつまって昼食になった

鶏をむしっては口にいれる

わたしたちは話しているのに

話し声はすりきれて

食事の音がもれている

じゃあ また

人を訪ねると

洗面台の水がたれている

背中をまるくして鉛筆をけずっているところだ

そのままの顔で眠っているのを

想像しても

人への距離がはかれない

わたしたちは紅茶をのんだ

夏はどうするのですか

と聞かれて

わたしは夏のことを考えられなかった

人は

ひとりになりたそうにあたりを見まわした

わたしは階段をおりて

通りを歩いた

じゃあ また

抱きすくめることも

河へ突きおとすこともできない

人が

もうすぐ

誰でもなくなってしまうのでもない

ピサ通り

食べちらした皿の前に

鼻をかんでいる男と向きあっている

テーブルごしに

手の鈍いあたたかみがつたわって

眼をつぶる

隣に住む老人の咳がきこえる

男は眠っていて

外を 重いトラックが何台も通る

夜明け前に

男が工場へ行く

オートバイの音が消えて

わたしは街の方へ歩いていく

ピサ通りは くらい

自分のような塊りがころがっているのではないかと 振りかえる

村

ピエロ・デッラ・フランチェスカの意地悪そうな顔を見た

絵画館の前の広場には

燕の影が あとからあとから流れている

通りを歩いていると

お婆さんが

そっちへ行っても何もないよ

と 迷惑そうに言った

自転車の男の子たちが

はやしたてながらついてきて

ちよっ と身体をつつついたりする

言い返してやっても

わたしの声はふわふわだ

やっ とバスに乗った

砂埃のなかで 大きな子がまだ手を振りあげていて

ぞつとする

村では

どこの店でも

お手洗いがこわれていて

なぜかかしてもらえなかった

グエル公園

わっと泣いていて

夢からさめた

夏の列車

知らない人に寄りかかって
眠っていた

汗をかいて

グエル公園に登ると

りゅうぜつらんのとがったところで

鉄の棒を持った少年たちが

コツコツ 洞窟のモザイクをはがしている

青空に 近い広場で

好きな人を

ひとりづつ 広場に立たせるように思い浮かべていて

酔みたいなのが

こみあげた

ここで みんなに 犯されたい

ホテル

国境の 小さなホテルの

早い夕食

老人たちが

今夜の脳味噌のフライについて話している

呼吸がくるしくなって

部屋にかえってベッドに横になっている

きょう 街を歩きまわっていた

歩くそばから

はさみ切られそうになった

あたりが詰ってしまう

海辺には 少しもじつとしていられなかった

どこから手をつければいいのか

頭が しびれていて
何も考えられない
窓がぱあつと明かるくなって
部屋が揺れる
通過する列車の音を
きいている
頭が しびれていて
何も考えられない
窓がぱあつと明かるくなって
部屋が揺れる
通過する列車の音を
きいている

ひばり

アルフレードは
ひばりを数羽ぶらさげて入ってくると
テーブルに置いて
水を飲んでいる
死んだひばりをさわってみた
それから
アルフレードの肩に さわった
彼が椅子から立ちあがってわたしを抱いた
思いがけない 動作をかわしたせいで
アルフレードを見つめた
小さな口
ふとった腕の金色の体毛
麦畑にかくれてひばりを狙っているのが見える
何かに 近づいていくこと
わらを掴むように

何かしなければならぬ
人の家の 清潔な台所に
陽が射しこんで
アルフレードと
彼の妻が
ありありと感じられる

〈付記 収録詩篇について〉

詩集『ピサ通り』（一九七六年・青土社）から十篇を選んだ。

〈著者略歴〉

川田絢音（かわた あやね）

一九四〇年、中国・チチハルに生まれる。

詩集に、『空の時間』『ピサ通り』『悲鳴』『サーカスの夜』
『朝のカフェ』『空中楼閣』『球状の種子』『泥土』『雲南』
『それは 消える字』『流木の人』。

*この「詩の図書館」内のあらゆる画像や文章などの情報を

無断掲載することは著作権侵害にあたる行為のため禁止します。